松本の企業 石巻に提供

被災者温めた「千人風呂」に幕

松本市宮渕2の水道設備業・ルピナ中部工業が東日本大震災後、ボランティアで被災地の宮城県石巻市内に設置した簡易入浴設備がこのほど、約1年半に及ぶ役目を終えた。津波で壊滅的な被害を受けた現地で、被災者の生活に不可欠な存在となり「千人風呂」の名で親しまれた。各家庭の風呂が復旧した後も、被災者同士が会話を求めて集い、心の支えにもなった。（横内里美）

「千人風呂」の休憩スペースで歓談する住民たち（昨年11月下旬）

無料開放 1年半続ける

昨年4月7日、避難所となっていた市中心部の寺院の敷地に、縦2・2メートル、横4・2メートル、深さ80センチの組立型プールを設営し、無料で開放した。従業員のアイデアで、日頃業務に使う工事用大型ボイラーや循環用のポンプ、発電機などを組み合わせた。現地近くの協力会社と連携し機材の修理やメンテナンスを続け、地元住民が運営を担った。

石巻市中心部は津波でほとんどの建物が1階天井まで浸水し、衛生状態が悪化した。震災直後から医療支援などに当たっていた松本市浅間温泉3の神宮寺・高橋卓志住職（63）が風呂の必要性を感じ、長年親交のあるルピナの市川荘一社長（64）に相談した。

現地には自衛隊設営の風呂もあったが昨年7月に撤退となった。しかし地震による地盤沈下で排水機能が滞り、風呂が使えない家庭はまだ多く残っていたため予定を延長して運営を続けた。手弁当のボランティアや工事業者らも含め、延べ約1万5000人が利用した。

入浴設備設営時の様子（昨年4月7日）

経費や設備の耐久性の面から撤退となったが、現地に常駐して千人風呂の運営に当たったボランティアの熊谷宏さん（56）＝宮城県涌谷町＝は「インフラが整ってもなお、いろいろな人と会えることを期待して住民が集まった」と感謝する。

石巻市では生活基盤の復旧作業は進んだが市外に避難した住民が戻らないなど、まちの活気までは取り戻せていないという。現地に何度と足を運んだルピナの入浴設備の責任者・麻和真樹次長（43）は「求められる支援のニーズが変わりつつある。自分たちにできることは何かを考え続けたい」と話している。